書評

金澤周作編『海のイギリス史――闘争と共生の世界史――』

菊池雄太

海事史（maritime history）研究は長い伝統をもつが、近年ではますます活発な国際的交流やテーマの多様化が見られるようになり、日本の西洋史研究においても、「海」を扱った著書、訳書、論文が増加している。しかし本書のように、正面から「海の歴史」をテーマとし、かつ初学者を意識した「海事史入門書」の形をとる書物は管見の限り皆無である。

本書はコラムも含めると二〇人に及ぶ執筆者による共著である。序論となる総説に続き、計一三章から成る三部構成の形をとり、加えて二〇の短いコラムが挿入される。第一部は海事史におけるイギリスの「強さ」を表す側面を扱う「光」、第二部は反対にイギリスの「弱さ」を示す側面を扱う「影」（この区分は「総説」で提起されるイギリス史研究上の問題点と関わる）、さらに第三部はイギリス海事史を相対化することを目的に他地域の事例を提供する「反射」と題される。

既に述べたように、本書はこれから歴史を学ぶ、あるいは研究しようとする初学者を意識して書かれている。本書評でもその観点から論評するのが適切であろう。以下では各章の紹介とコメントを述べ、最後に全体に関する論評を行いたい。

まず本書は編者（金澤周作）による入念な総説から始まる。論点となるキーワードが多いためにすべて紹介しきれないが、本書の目的はなによりもまず「おもしろい歴史」を提示することであり、海の歴史はそのための格好のテーマであるという。海のイギリス史が持つ意義として、編者はイギリス史叙述が三つの「二重性」、すなわち「ローカルな歴史とグローバルな歴史」、「陸の景観と海の景観」、「クルーソー的イギリスとガリヴァー的イギリス」に引き裂かれていることを指摘する。順に一言で説明すると、国内史と帝国史の対話が少なくなっていること、海という対象を歴史学が扱いきれていないこと、イギリス史叙述はクルーソー的「強いイギリス」を中心とし、ガリヴァー的「弱いイギリス」としての側面が十分に描かれていないことが問題視されている。その上で、「海の歴史は、まさにこれら三つの二重性を統合的に理解する可能性を持つ（一一頁）」とし、上述の「光」、「影」、「反射」の三側面から、海の歴史に関わる基礎的事項に加え、多彩な研究動向と研究トピックを提示するという本書の姿勢が示される。

第一部では、イギリス海事史の「光」の側面が扱われる。第一章（石橋悠人）は、イギリスが未知なる海を切り開き解明していく過程を、「探検・科学」というカテゴリから描き出し、同時にその枠内で近世イギリス海外進出の基礎的事項を整理することで、導入章としての役割を果たしている。探検航海を通じて蓄積された航海、観測、測量、天文、地理などに関する有用な知識がイギ

リス海上進出の基盤を準備し、さらに科学的探検により現地の動植物や物品の収集、スケッチ、生物調査が進められることで科学の発達が促される様が、具体的な人物や事物を通じて叙述される。近年でも注目を集める「知識」を切り口として海の歴史にアプローチする方法が示されており、紹介されるトピックには高校世界史でも習う人名や事項が多く含まれるため、たとえば西洋史を専攻する学部生は、既習のキーワードを本章のテーマに有機的に結びつけ、深めることができると思われる。

第二章（薩摩真介）では共和政期から一八世紀に至るイギリスの「海軍」が扱われる。個々の海戦や戦術といった古典的トピックではなく、海軍組織と制度（保有艦隊の発達、行政組織の構造、財政）、軍艦内社会の構成（乗組員の構成、仕官の出自や登用・昇進、水夫のリクルート）、海軍の役割（本国防衛、貿易保護、外地での作戦行動）などの制度的・社会経済的側面に焦点が当てられる。個人的に興味を引かれた部分は、イギリス海軍力が他のヨーロッパ諸国に対し優位を保った背景にはその優れた資金調達能力があり、それはイギリスの安定した信用制度に基づく債券発行にあったことを示した点である。この点は後のフランス海軍を扱った章とリンクし、さらにイギリスが近代世界のヘゲモニーを握ることにいかにして成功したのかという大きな問題とも関わるであろう。

第三章（坂本優一郎）「海と経済」では、漁業（タラ漁、ニシン漁、グリーンランド捕鯨）と海運業に光が当てられ、とりわけ海の現場に生きた人々に注目することでその特質を明らかにする必要性が喚起される。具体的には、漁業に関しては漁師やニシン保存処理業者、さらに子どもと女性が、海運業に関しては商人、船乗り、船主などが挙げられ、これら海域社会を構成する人々の生活、行動、人的・社会的関係を研究する方向性が示される。とくに漁業史は日本であまり注目されていない分野であり、今後の研究の進展が期待される。新しい研究方向を示す部分ではニシン漁のみが取り上げられているが、グリーンランド航行と捕鯨は第一章の「探検・科学」とも関わる上に日本での研究が手薄な分野であると考えられるので、ここで指摘したい。海運業の部分では、昨今盛んに論じられる「環大西洋世界」のような枠組みは対象とする空間が閉鎖的に捉えられる危険性があるので、他の諸海域を含めたより広い視野のもとで比較・関連付けを行い、海を媒介した経済史の実像に迫るべきという提言がなされる。

第四章（林田敏子）では「港」が扱われる。イギリスにおける港の形成は、王権による統一的体系のもとに進み、ロンドンの圧倒的地位が確立するに伴い、諸港は分業体制をとるようになったという。これは、たとえば皇帝や領邦権力の影響が弱かった北ドイツの港湾の場合と明確に異なるため、この分業体制確立の具体的背景と過程はどのようであったか、すなわち港湾間の競争は存在したのか、王権の主導あるいは介入はあったのか、それともより経済的な過程で形成されたシステムなのか等の、比較史的な関心が喚起される。本章ではその他に港における人々、検疫、労働運動、港の表象など多彩な論点が提示されるが、今後の研究の方向性のひとつとして、移民研究や外国人研究といった既存の分野に「港」の視点を盛り込み、マルチエスニックな空間として港を分析することが提案される。この点では、たとえば「宮廷ユダヤ

人（Court Jews）」に対して「港湾ユダヤ人（Port Jews）」に注目する近年の研究動向などが挙げられるであろう。

第二部は、イギリス海事史の「影」の側面に注目する。第一章（金澤）は「海難」をテーマとし、これまで未開拓であった当該テーマにいかなる接近方法があり得るのかが示される。研究の方向性としては、海難の実態、海難対策、さらには海難のイメージという、表象や言説という観点から海難を分析するアプローチが紹介される。未開拓のテーマであるためか、史料の紹介がとりわけ丁寧になされているのが本章の特徴である。具体例を挙げるならば、量的史料として海難報告や近年刊行されたインデックス、質的史料として役人による海難調査報告、定期刊行物の報道、さらに作家や海難体験者による難破譚、図像、絵画作品などがある。これら性格の異なる史料それぞれの用い方も教示されている。とくに海難をめぐる表象や言説の比較史、メッセージや読まれ方の分析などは、時代・地域横断的な広がりをもつ発展可能性を秘めたテーマに思われた。

第二章（金澤）「密貿易と難破船略奪」では、研究の枠組みとして「社会的犯罪」が提示される。すなわち、法規制上は犯罪であっても、民衆の考えでは正当とみなされ慣習的に繰り返される非合法行為に、密貿易と難破船略奪は数えられるという。それでは「社会的犯罪」史研究において、密貿易や難破船略奪はどのような像を提供するか。本章ではこれら行為の具体例とともに当局の対応、さらに密貿易従事者や難破船略奪者の意識が扱われ、日常的に行われる密貿易に、難破船略奪の非日常性・祝祭性が交わるマリタイム・コミュニティの世界が描かれる。それは「社会的犯罪」研究が想定した支配・被支配の二項対立的観点からは捉えきることのできない世界であり、そこに研究可能性が見出され得るという。

第三章（薩摩）で論及される「海賊」の歴史は、従来、とくに日本では近年まで真剣な研究テーマとされてこなかったが、実は近世のイギリスと海との関わりを考える際には決して無視することのできないテーマであるという。そこで本章が主眼を置くのが、海賊活動の歴史的文脈や社会経済史的背景に注目することによる学問的海賊研究である。海賊の表象やジェンダーを扱った部分も注目に値するが、評者にとくに興味深かったのは、「海賊発生のメカニズムと海賊の鎮圧」を扱った節（一八七‐一九二頁）である。そこでは海賊活動の盛衰が社会全体における労働力の需給メカニズム、商人や本国政府の利害関心といった要素に結び付けられる。また海賊鎮圧の歴史は、ポリス研究の脈絡からも興味深いテーマとなる。本章が指摘する海賊鎮圧における他国との連携という観点を持ち込めば、陸地に比べ境界線の曖昧な海の世界における犯罪取締りの特徴が描けるであろう。

評者自身がそうであったが、第四章（薩摩）で扱われる「私掠」については、一般に「国家が認めた海賊行為」くらいの曖昧なイメージしか持たれていないのではないだろうか。本章は、私掠の種類、規模、私掠活動のプロセス（資金、船舶、水夫の確保、拿捕認可状の申請、捕獲物の審査、収益の配分等）、私掠の軍事的・経済的意義など、私掠に関する正確な知識をコンパクトに授けてくれる。評者が注目したのは中立船舶の問題である。本来拿捕対象外に該当する中立船舶であっても、拿捕されることはたび

たびあった。本章でも「国籍」、「中立」、「敵」をどう判断するかという線引きは微妙な問題であり、研究の必要性が喚起されている。加えて、中立船舶の拿捕を正当化する上でどのようなレトリックが用いられたのかも注目に値するであろう。また反対の視点から、中立船舶による貿易活動がどれほど有効で、経済的な意義を持ちえたのかは、商業史の重要なテーマであることも指摘したい。

第三部では、他地域の海の歴史からイギリス海事史が「照射」される。第一章（君塚弘恭）「近世フランス経済と大西洋世界」では、フランスの海洋性を強調しながら、陸の世界とのつながりも重視した叙述がなされる。フランス国内貿易、対ヨーロッパ貿易、ヨーロッパ外世界との貿易における商品流通、輸送パターン、商業の担い手などが手際よくまとめられ分かりやすいが、用語法について若干の明確化が必要と思われる。たとえば本章で多用される様々な規模や機能の「…市場」である。とくに「フランス国内市場」の節で、「もっとも狭い範囲でありながらもっとも伝統的活重要な商品市場、いわゆる『局地的市場圏』」としてボルドーとブルターニュ地方のブドウ酒と小麦の交換が挙げられているが、一般に「局地的市場圏」と言った場合、大塚久雄の言うところの都市商業・手工業のギルド規制から自由な農村間で局地的に売買が行われる市場圏が想起されるため、説明が必要であろう。

第二章（阿河雄二郎）の「近世フランスの海軍と社会」では、フランスの海軍の構造、海港、工廠、水夫や水平の徴募、海事裁判所の役割などが分かりやすくまとめられている。とくにイギリスとの関係や比較が各所でなされており、示唆に富む。たとえば英仏海軍の財政面での比較である。フランス海軍は一七〇〇年頃までに急速に拡大したが、そのことによる財政的圧迫を前に海軍の軽量化・効率化に転じ、イギリスよりも低コストで海洋帝国をまかなった。それでも「フランスには海軍大国を目指す場合の負の遺産が重くのしかかり、構造的な限界がつきまとっている（二四九頁）」という。それに対し、本書第一部第二章によると、イギリスは安定した信用制度による資金供給システムを確立したことで巨大な海軍を維持し得た。海港の発達、海軍工廠、乗組員の徴用、難破船や海難物の扱いなども、本書第一部と第二部で描かれたイギリスの場合と比較することができ、興味深い。

第三章（合田昌史）「ポルトガル・スペインと海」では、いわゆるヨーロッパの「発見の時代」において両国が果たした先駆的意義が検討される。西アフリカ、近隣大西洋諸島への進出に始まる対外拡張がいかに未知の世界を切り開き、世界を「分割」したのか、その体制が後発のオランダやイギリスによりいかなる挑戦に晒されたのかが描かれる。航路の発見と開拓、海洋支配、交易拠点の形成、海難、ポルトガル・スペイン船舶に対する私掠行為と護送、『自由海論』をめぐる論争などのトピックは、本書でイギリス、フランス、オランダについて扱った各章と結びつけて読むことができるように記述されている。ただ初学者に向けるのであれば、他国と比べた場合のスペイン・ポルトガル対外進出の特徴を、より明示的にすることもできたのではないかと思われる。たとえばポルトガル海上帝国が「交易拠点帝国」であったことの背景やその帰結などである。

第四章（大西吉之）「オランダと海」では、東インドとの関わ

りに焦点を絞ってオランダ海事史が語られる。オランダの海事史研究全体を概観する節が設けられている点が本章の特徴のひとつであり、有益である。欲を言えば、日本の研究史についても一言欲しいところであった。また本章では、女性とオランダ東インド会社という新鮮な切り口が提供されている。東インド会社に雇われた船員の妻の存在は、船員そのものに対する関心の薄さ、薄給であった船員の大半が未婚者とみなされていたことなどを理由として、従来の海事史研究において無視され続けてきたが、ようやく一九九〇年代になって「発見」されたという。夫の航海中、陸に残された妻たちは会社から一定の金銭的配慮を受けたが十分ではなく、副業に従事していたが、その中でも注目されるのが、港町の宿屋、酒場、売春宿などで東インド会社の船員確保のためのリクルーターとして機能した妻たちの存在である。彼女たちに光を当てることにより、男性偏重の海事史研究の見直しが期待される。

第五章（村上衛）はヨーロッパ外世界、清朝の事例からの「照射」である。「近代中国沿海世界とイギリス」という表題からも分かるように、主眼はイギリスとの関係に置かれる。一七世紀後半に鄭成功の抵抗を排したのちの清朝の沿海支配は緩やかな管理体制を特徴とし、一八世紀には海上貿易が大いに発展した。しかし一九世紀になると清朝の貿易・治安管理は揺らぎ、沿海のコントロールは困難に陥り、混乱はアヘン戦争を通じさらに拡大した。その際に清朝にかわり沿海の秩序を回復するものが必要とされ、その役を担ったのがイギリスであった。清朝は沿海管理を業務委託することでイギリスを「利用」したのである。しかし委託にあまりに依存したことで自前の海軍整備が遅れ、清朝はのちの対外戦争において大きな「ツケ」を支払うことになったという。緩やかな沿海支配体制から清朝が辿ったこのような道筋は、グローバル・ヒストリーの観点からも興味深い素材を提供するであろう。

さて、冒頭で述べたように、本書は海の歴史の入門書である。その意識が徹底された作りになっていることを、全体の論評として第一に指摘したい。まず、緻密に練り上げられた全体構成が印象的である。「海」という、ともすれば捉えどころのなくなるテーマを系統だった筋道にまとめるべく総説で入念に経糸が引かれ、緯糸となる各章は設定された論点に正確に答えている。またそれぞれの叙述が有機的にリンクするように丁寧な目配り、工夫がなされ、複数著者により書かれたことによる不統一感をあまり感じさせない仕上がりとなっている。

ほとんどの章で、それぞれのテーマに利用できる史料、研究手法が詳しく紹介され、巻末には日本でアクセスできる海事史関連史料、さらにとくにお薦めのものには印を付した二次文献の案内がなされており、初学者にとって行き届いた設計である。今後期待される研究の方向性は各章で常に提言され、海事史研究の多彩な発展可能性を示している。

さらに特筆すべきは、充実したコラムである。紙幅の都合上残念ながらひとつひとつを挙げることはできないが、これらコラムにより一冊の書物の限られた範囲内でできる限り多くのトピックと地域を紹介することに成功している。実は評者は本書評を執筆するにあたり、漏れたテーマがないか「粗探し」をしたのであるが、後述の一点を除き、海事史の主要テーマは本論とコラムによ

って触れられているように思われた。

一方、疑問点もある。それは、陸と海の対立的把握という問題である。本書では、「陸地の論理を海に延長したような（九頁）」、「陸的発想（一六頁）」、「陸地の論理で閉鎖的に捉える（九九頁）」、「ふだん陸上の歴史の中で扱われるもの（二四一頁）」といった表現が批判的ニュアンスで用いられている。海の社会には陸と異なる独自の論理が働いており、これまでのアプローチでは捉えきれない「海の歴史」があることは首肯できる。しかし、上述の表現が果たして何を指すのかは、必ずしも具体的に述べられていない。対立軸を明確にし、「海の歴史」のおもしろさを際立たせるために意図的に用いられた表現であろうが、後段で再び触れるように、入門者に意図せぬ印象を与えないためにも、明確な定義が必要だったのではないか。

その関連で言えば、本書が「総説」で論じられているように「陸の景観と海の景観」の「二重性」に引き裂かれたイギリス史を問題視するのであれば、海の世界に視点を定めつつも、陸を含めたより広い観点を押し出し、海の世界が陸の世界に及ぼした影響や相互関係をクローズアップすることができたのではないか。たとえば本書にコラムを提供したK・ヴェーバーの著書『大西洋貿易におけるドイツ商人（*Deutsche Kaufleute im Atlantikhandel*, München 2001）』は、「海事史」を直接のテーマとした書物ではないが、大西洋港湾都市で活動するドイツ商人を介して内陸深部が大西洋の開けた海洋世界と結びつき、ひとつの経済圏を形成していったダイナミズムが描かれている。たしかに本書の中で陸海の関係に目配りした箇所は見受けられる。しかし、「陸地の理論」、「陸的発想」に表される批判的トーンが明確な定義のないまま繰り返されている印象は否めない。編者が問題提起した「陸」と「海」の乖離は、果たして本書により繋ぎ合わされたのか。本書が対象とする初学者が素朴に受けるであろう印象を想像すると、「海の歴史」を「陸の歴史」に結び合わせる作業は――本書がそれを意図しているかは断言できないが――読者の手に委ねられるのではなく、本書の中で陸海両者が交わる世界を意識的に打ち出す必要があったのではないか。

本書で扱われるテーマは多岐にわたり、コラムも含めると海事史研究の主要テーマを網羅していると言える。しかし私見では、環境史について今少し多くの紙幅が割かれるべきに思えた。一冊の書物の限られた範囲内であらゆるテーマを扱うことは不可能であるのは当然であり、また漁業史を扱った部分には研究動向として「環境史をはじめ学際的な傾向も見出せる」と一言あるが、環境史が海事史研究における重要テーマのひとつであることを考慮すれば、海洋資源の問題に絡め立ち入った紹介をすることもできたのではなかろうか。

本書評で紹介しきれなかったトピックは多く、コラムの個別論評は割愛せざるを得なかったことは、寛恕を乞いたい。本書が、目標として掲げた「おもしろい歴史」を読者に提供し、そのようなおもしろい海の歴史の研究に取り組むための道標を示すことに成功していることは、間違いないであろう。

（A五判　三七六頁　二〇一三年　昭和堂　二八〇〇円＋税）

（京都産業大学経済学部特定研究員）